

偏愛侍女は
黒の人狼隊長を洗いたい

あきのみどり

Midori Akino

RB

レジーナ文庫

登場人物紹介

エメリヒ

砦の少年隊士。
人族と犬族の混血で、
そのことを気にしている。

イグナーツ

ヴォルデマーの側近。
クールな見た目に似合わず
人情家で涙もろい。

ローラント

砦の少年隊士。イグナーツの弟で、
ぽっちゃり体形の臆白小僧。

ルカス

フロリアンの護衛。ミリヤムとは
幼馴染で互いに天敵のような存在。

ウラ

人狼の女性。砦近くにある集落の
長の娘で、ヴォルデマーのことが好き。

ヴォルデマー

砦の人狼隊長。真面目で穏やかな性格。
仕事一筋だったが、ミリヤムとの
出会いで何かが変わり始め――？

フロリアン

侯爵家の三男。容姿も心も
天使のように美しく、
ミリヤムのことを大事に思っている。

ミリヤム

侯爵家の侍女。幼い頃から
フロリアンに仕え、彼に心酔している。
思い込みが激しく一人で暴走しがち。

目次

偏愛侍女は黒の人狼隊長を洗いたい

7

書き下ろし番外編

風邪と、ときめき過剰

365

偏愛侍女は黒の人狼隊長を洗いたい

ミリヤムはその金色の瞳を見て、ぽかあんとしたのち、ハッと我に返った。

あれ私……なんでこの人を押し倒して……？

「……はれっ!」

自前のメイド服はずぶ濡れだった。手を突いた下には、ビショビショに濡れた黒い毛並みの男性の姿がある。その男性と視線が絡んだ瞬間、ミリヤムは正氣に戻ったのだ。

その人は狼か犬もしくは狐の獣人男性で、それ自体は特に珍しくもない。

小柄なミリヤムに突進されてぶっ倒れたのが不思議なくらい体格はよかったが、どうやら律儀に彼女を受け止めてくれた末に、このような体勢になったらしい。

とにかくミリヤムは今、彼に向かい合う形でその膝の上にまたがっていた。

呆れたことに、飛びかかっておきながら、彼女は今初めて相手をちゃんと見たのだ。なんせここに乗り込んできてすぐ、手近にいた相手に無差別に襲いかかったものだから……

瞳を瞬かせながらよくよく見ると、漆黒の毛並みに覆われた肉体は鍛えられていて逞しい。今は濡れてばらばらに乱れた毛並みも、きちんと手入れすればさぞかし手触りがいいことだろう。驚きに見開かれた瞳は真ん丸で……まるで小さな月が二つ並んでいるかのようだ。

ミリヤムはその瞳をもっと傍で覗き込みたい衝動に駆られた。惚けかけ、なけなしの恥じらいを思い出し……かけたのだが。

瞳を覗き込もうと間をつめると、まずその体臭にムツとした。手に触るごわごわの感触と、それから片手に握ったままの石けんの感触とが、彼女に怒りを思い出させる。

それは使命を呼び覚まし、彼女に自分が何故このベアエールデ砦に乗り込んできたのかを思い出させた。

ミリヤムの脳裏に、金髪の青年の姿が過る。

「は!? そうだ坊ちゃまだ!!」

「……は……?」

月の双眸の主が不可解そうな表情でミリヤムを眺めている。けれども怒りは膨らみ切っていて、歳相応の恥じらいなど吹き飛んでしまった。

そう、たとえ——己が馬乗りになっているその見知らぬ男が裸であろうとも。

ここが公衆の浴場であろうとも。

周囲で裸の獣人族の男達が、湯煙の中あんぐりと口を開けてこちらを凝視しているようにも。

なんか色々見えちゃってても。

ミリヤムは石けんを割れんばかりに握り締めた。

「さあ！ 黒の旦那様……お覚悟なさいませ!!」

* * *

侍女ミリヤムの世界の中心は、坊ちやま。ことりヒター侯爵家の三男フロリアンである。

物心ついた時には彼の傍にいて、ずっと彼に仕えてきた。幼少期はあんなに愛らしい

御子は他にいないと思っていたし、十数年経った今でもミリヤムの中でその認識は変わっていない。

彼を守ることで己の使命、とミリヤムは信じて疑わない。彼の乳母を務めた母が亡くなる間に言い残した言葉も「ミリー、坊ちやまをよろしくね……」だった。守れなかったら親の遺言を破った沙汰で地獄に落ちる、と、ミリヤムは本気で信じていた。

そんな彼女が砦にやってきたのは、ほんの数日前のこと。

「え、なんだよ……人族かよ……」

あからさまにガッカリしたというその表情は、門の前に立つ栗毛の娘——ミリヤムに向けられたものだった。

ベアエールデ砦の門番は熊の顔をした大男二人で、先ほどミリヤムが手渡した紹介状を彼女に突き返し、「さつさと入れ」と顎で促す。ミリヤムは重そうな鉄製の扉を軽々と持ち上げた大男に軽い会釈をして、その内側に足を踏み入れた。

背後からは「なんで人族なんか……ニーナ婆さんの代わりだと言っから婆さんの孫娘とかが来るのかと思ってたぜ」「可愛い熊族のな。あんな薄毛の細っこいので大丈夫かねえ」と談笑する声が聞こえてくる。

だがミリヤムはわざわざ相手にするようなことはしなかった。

この世界には多様な種族達が暮らしている。特にこの国には人族と獣人族が混在しており、種族ごとの文化の違いはあれど皆おおむね平和に共存していると言っている。

広い国土は王のもといくつかの領に分かれ、王に任じられた領主達がそれぞれを治めている。その特色は様々で、気候が比較的穏やかな平地の領には人族が集まり、寒さや地形の厳しい領には毛並み豊かな獣人族が集まる傾向にあった。

この北の辺境伯領は後者の典型で、多くの獣人族の集落が栄えている。逆に人族は極端に少なく、ベアエールデ砦のような国境付近の辺境ではあまりその姿が見られない。ゆえにこうして物珍しげな視線や押搦を受けることも珍しくはない。

だが、ミリヤムにはそんなことはどうでもよかった。彼女の目的はただ一つ。

この^{獣砦}と悪名高いベアエールデ砦を、敬愛してやまない彼女の主、坊ちやまにとって相応しい場所にするのである。

ここへ来る少し前のこと――

坊ちやまが、どこかの砦の警備隊に派遣されるといふ噂を聞きつけたミリヤムは、慌ててその真偽を本人に問いただしに行った。

彼が侯爵邸からいなくなるということだけでも冗談ではないと思ったミリヤムであったが……その行き先が巷で噂の^{獣砦}だと聞かされて――目の前が真つ暗になった。「そつ、んな!! 馬鹿なつっ!!」と坊ちやまの前で大絶叫したミリヤムは、侍女頭になるさいと目いっぱい叱られた。

しかし獣砦と称されるベアエールデが、大いに野性味溢れる場所であることは、この侯爵領でも有名な話だった。砦の中には不潔で数多の虫が蠢いているだとか、多くが獣人族であるという隊士達は泥にまみれて生肉を喰うだとか……そんな噂がまことしやかに囁かれていた場所なのだ。

対してミリヤムの坊ちやま、ことリヒター家のフロリアンといえば、美しく聡明な青年で、普段は侯爵である父や跡取りの兄を補佐し、領地の内務の一端を担っている。その容姿も手伝って巷での評判はすこぶるいいが、本人は兄達に華を持たせて控えめにしていることが多い。そんな彼に心酔しているのが――彼の侍女たるミリヤムだった。彼女が母の乳から離れるのと入れ代わるようにして侯爵家にフロリアンが生まれ、ミリヤムの母が彼の乳母となった。以来、周囲の皆が「フロリアン様は天使だ」と口々に囁き合うのを聞いて育ち、それを信じ切っていた。

そんなミリヤムが噂の砦に主が入っていく様を想像した時の衝撃ときたらひどかつ

た。それは彼女にとつて、戦場に丸腰で立てと言われているくらい恐ろしいことに思えた。

もちろん彼女は全力でその話に反対した。

「坊ちゃま正気ですか!? 坊ちゃまがいくら聡明で剣術に優れておられて天使のように美しくても菌には勝てないんですよ! 坊ちゃまの儂い免疫力で獣砦に乗り込んで無事でいられるわけじゃないじゃないですか!? や、病……死……やばい!! 汚染される!!」
 ほぼ息継ぎなしでまくし立てたミリヤムは真つ青だった。が、当の本人はというと、のんびり穏やかに、それでいて煌びやかに微笑んでみせる。「ミリー、これは私が志願したことなんだよ」と。

「砦の長殿がとてもお困りのようなんだ。私も内務ばかりでまだまだ経験が足りないし、若輩者の私が助けになれるのなら光栄だ。きつといい経験になるだろう」——と、嬉しそうに言われ、ミリヤムは崩れるように床の上に沈んだ。

「おああああああ!! 坊ちゃまひどい! でも美しい!!」

……彼女の中に、愛するフロリアン坊ちゃまの望みを妨害するという選択肢は存在しなかった。微笑むフロリアンによしよしと頭を撫でられながら、その「砦の長殿」を心の底から呪って……からの彼女は素早かった。

同行したいという懇願をやんわりと、しかしきつぱりとフロリアンに却下されたミリヤム。彼女は落ち込む間もなく、すぐさま伝手を辿りまくって、伝手の伝手の伝手の伝手の伝手の先くらいで、もうすぐ獣砦の下働きの老婆が退職するだろう……という話を聞きつけた。

ミリヤムは速攻でその老婆に手紙を送り、速攻で荷物をまとめると、辺境伯領から行商に来ていた獣人族達に金を積んで頼み込み、帰還の一団に同行させてもらった。

慣れない白雪の道を、時に雪に埋まり窒息しそうになりつつも、彼等に助けられながらなんとか越えて、ミリヤムは件の老婆の家に押しかけた。それでもふもふの熊の老婆に退職祝いと称した賄賂と土下座を贈って……やつのことでその後任の紹介状を勝ち取ったのだった。この頃には、長年こつこつ貯めていた貯金はすっかり底をついていた。

それがつい先日のこと。

暇をもらいたい旨を書いた手紙を郵便馬車に託しておいた……のはついさつき。
 事後承諾の強硬手段に出たのは、周囲に止められないためだ。獣砦に行くなんて事前
 に申し出れば、猛烈に止められることを彼女もよく分かっていた。しかし、ハンカチの

端をかじって泣きながら、邸で大人しく主を見送るという選択肢はなかった。フロリアンの健康は何よりも大事だった。

「こうするしかないんだわ……坊ちゃまの健康に障らないよう、私が砦の水準を引き上げるしか……ないっ!!」

ミリヤムはそびえ立つ砦を睨んで拳を突き上げた。

——ちなみにミリヤムが邸へ送った手紙の中には、「坊ちゃまの健康と美を損ねたら領地の友達の間で暴動が起きる」「領地間の和平のために戦ってまいります」と書かれていた。

ミリヤムは——ちよつと(?) 思い込みの激しい娘だった。

後日、侯爵邸でその手紙を読んだ者達は、恐ろしい行動力だと評価しつつも、ひどい頭痛に悩まされたという。「あいつ、砦長に絶対嫌がらせするぞ!!」……とは、青ざめた執事長談。

砦の門を潜ったあと、ミリヤムはその聞きしに勝る環境に思い切り顔をしかめた。

「う……なんなのこの臭い……」

庇うように鼻を手で覆ったが、それでも辺りはひどい臭気だった。何か腐敗したよ

うな臭いと獣臭さ、泥臭さのようなものが濃厚に混じり合つてとにかく臭い。

臭いの元はどこかと周囲を窺うと、所々雪に覆われた黒土の広場の先に、古い石造りの城砦がそびえ立っていた。重厚な雰囲気、威厳ある建築物だった。

だが残念なことにほとんど手入れがされておらず、あちこち傷みや汚れが目立っていた。何よりゴミが多すぎる。壊れた武器の破片から食べ残し、丸めた紙、なんだかよく分からない塵芥……年代物と思しき黒い染みはもしかして血の痕か。ミリヤムはその有様に絶句した。

そうして途方に暮れながら重い足取りで敷地の奥へと進んでいくと、数名の隊士達とすれ違った。武装した男達は皆一様にボサボサだ——何がって、毛並みが。いかにも野性味溢れる彼等は足に泥がついていようが、毛並みが乱れていようが露ほども気にならないらしい。時折身体をボリボリと掻きながら、異臭漂う広場の中でゲラゲラと笑っている。

そりゃあ身体だって痒いでしょうよと思しながら、ミリヤムは青ざめた。今すぐ全員桶に突っ込んで丸洗いにして天日干しにしたい衝動に駆られる。

「こ、こんな不潔なところに……いずれフロリアン坊ちゃまが来てしまう……」

昔は喘息が出るというって、邸の飼い犬や馬にも触らせてもらえなかったフロリアン。

成長と共にその症状も鳴りをひそめているとはいえ、彼がここに来たら一体どうなってしまうのか。なんとかかという砦の長の役に立ちたいなどと主は言っていたが、その前にあの妖精のような人は一発で雑菌に侵され死んでしまうのではないか、とミリヤムは怯えた。その秀麗な笑顔を思い出すと、栗色の瞳にじわりと涙が浮かぶ。

「……お可哀想なフロリアン坊ちゃま……」

ミリヤムはペソをかきながら、雪のちらつく灰色の景色の中をとぼとぼと歩いた。そうして鼻を寒さに赤らめ、俯いて歩いていると——ミリヤムは不意に、ドンツと何かにぶつかった。

「おうっ!？」

大きな荷物を担いでいたミリヤムは、その重みで簡単によるめく。

「ひっ!？」

身体が斜めになった瞬間、ミリヤムは脇から抱えられ、気がつくど誰かにぶら下げられていた。おかげで冷たい雪の上に転倒することは免れたのだが、大きな荷物を背負っている己が軽々持ち上げられたことに、ミリヤムは目を丸くする。

その相手は小柄なミリヤムからすると、山のように大きな人物だった。頭から足元まである黒い外套に身を包み、フードを目深にかぶっている。口元も分厚い防寒用の布で

覆われていて顔がほとんど見えず、どんな種族なのかは不明だが、外套の下からわずかに黒い尻尾が覗いている。

「すまない。……なんだ泣いているのか?」

男はすぐにミリヤムを雪の積もった地面に下ろしたが、その目の端に光るものを見て取ると、そんなに痛かったのかと尋ねるように首を傾げた。

それを察した瞬間、ミリヤムは何故だか無性に泣きたくなる。針で突かれた風船が破裂したかのように、瞳から涙が零れ、怒りが一気に溢れ出してきた。

「っ!？」

「泣きたくもありませんよ! なんですかこの砦の有様は!! まるでゴミ溜めじゃないのですかっ! こんな、こんなところに(坊ちゃまが)お勤めしなければいけないなんて……砦の長様は一体何をなさっておいでなのですかっ!？」

いきなり汚い汚いと喚き出した娘に、男は外套の奥で一瞬目を丸くして——それからぼりぼりと頬を掻いた。

「……すまない。むさ苦しい男所帯ゆえ……許せ」

男がそう言うも、ミリヤムは殺気を放たんばかりの顔で彼を睨んだ。ただ、鼻水が出ている顔はかなり間抜けだった。

「男所帯だと言えは済むと思わないでください!! 男性だって獣人族だって不潔にしすぎたら病気になるんですよ!」

くそお、と男を睨みながら、ベソかきミリヤムは地団駄を踏んだ。

「私がかっと……ここを貴婦人でも暮らしているような清潔な場所にしてみせる!!」

ヤケつばち気味の叫びが周囲に響く。正面でそれを見下ろしていた顔の見えない男は、その外套の内側で呆氣にとられているようだった。

しかしミリヤムはヤケにならざるを得なかった。彼女はこの恐ろしいほど不潔な砦を、主が到着する前に綺麗にしておかなければならないのだ。それも恐らくたった一人で。

男は雪を踏みつけて怒っている娘を無言で見ていたが、不意に、その外套の中でくすりと笑った。

「……そうか、頑張るといい」

何かが顔に迫ってきて、ミリヤムは咄嗟に目をつむる。

「っ!? うぐっ……」

……手ぬぐいだった。

男はどこから取り出したそれでミリヤムの顔をぐいぐいとぬぐう。こんな場所で暮らす男の懐から出てきたのかと、ミリヤムは一瞬身構えたが……柔らかな布からは清潔

な香りがした。

少しほっとして、されるがままになっていると、次いで頭にぽんぽんと軽い重みを感じる。どうやら——ちらつき始めた雪を彼女の頭の上からはたき落としてくれたらしい。その宥めるようなリズムに、ミリヤムはなんだか肩から力が抜けていくような気がした。

「おそれ、いります……」

「早く中に入りなさい。人の子にこの寒さは辛かるう」

それは雪の中で心が温くなるような、穏やかで優しい声音だった。

「あ」

外套の男はミリヤムが背負っていた荷物を取り上げて数歩歩き、彼女を手招いた。ミリヤムが慌ててついでいくと、通用口らしき扉の前まで彼女を導き、その戸を開いて中を指し示す。

「通路を右に行きなさい」

「あ、りがとうございます……」

「……衛生状態の件は——」と、男が言いかけた時、遠くから慌ただしく隊士が駆け寄ってきた。

「ヴォルデマー様! そこにいらしたのですか!」

ミリヤムに荷物を手渡ししながら、男はその隊士の耳打ちに耳を傾けている。すると不意に、男が防寒用の布の内で小さくため息を落とした。

「……?」

その響きにミリヤムは首を傾げる。なんだか男は、ひどくくたびれているように見えた。それから男は隊士に向かって「分かった」とだけ頷き、身を返した。

「あ……ちよっ」

去つていこうとする男を引き止めるように、ミリヤムは慌ててその腕にかじりつく。

「それ！ ください！」

「……? ……それ？」

ミリヤムは、彼の手の内を指差した。

「昔から私は粗忽者そこもので有名ですが、いくらなんでも己の鼻水がべったりついた手ぬぐいを人様に押しつけるほどではございません！ 洗ってお返しします。およろしく下さい」

その申し出に男は「不要」と言いかけたが、彼女は手ぬぐいを問答無用でひったくった。もちろん親切に対する感謝の念もあったが、この皆の有様を見るに、このままでは男のポケットの中で十年くらい寝かされるんじゃないかと疑つてもいた。自分の鼻水がだ。

「大丈夫、親御様のお形見のように丁寧に扱わせていただきます！ では！」

「あ、おい……」

ミリヤムは「ありがとうございます」と叫びながら、スタコラさつさと逃げ出した。取り返されてなるものかと思いつつ、なにせよ親切な人がいるようでよかったと少し安堵していた。

の、だが――

「……しまった……」

皆の中に入ったあと、ミリヤムは冷たい廊下に両手と膝をついてうなだれていた。手ぬぐいを洗って返すと言っておいて、その相手をきちんと確認していなかったことに今更ながらに気がついた。

隊士が男の名前を呼んでいた気もするが、坊ちゃま関係以外では、人物――特に男性の名を覚える気のない残念思考のミリヤムは、それをまったく覚えていなかった。

「……私は一体どなたの親御様の形見を預かったの……?」

しかも勝手に、ただの手ぬぐいを形見にしてしまっている。ミリヤムはうんうん唸うなつた挙句あげく呟つぶやいた。

「……黒い外套がいとうの君……いや……お疲れ気味の手ぬぐいの君……いいか……」

な……」

ミリヤムは、アア、ナルホド、と思った。嗚呼……なるほど……と。
ミリヤムが遠い遠い目をしたのはわけがある。

猫族の上役に連れてこられた部屋の中には、これからミリヤムが共に働く砦の使用人仲間達が顔を揃えていた。その面々を見て、ミリヤムは意気消沈したのである。

新人娘をのほほんと見やる十数名の同僚達は、全員が毛がふさふさで腰の曲がった――ご老体で。

「あらあらマックスさん、新しい人？ ニーナさんの代わりの？」

「まあまあ……随分可愛らしい……えーと猿族さん……あら、人族のお嬢さんなの？ よく見えなかったわあ。ふふふ」

彼等はこのこしながらよかったよかったと口々に言い、ほのぼのと頷き合う。

「ここに若い人族のお嬢さんが来るなんて珍しいこと。お嬢さん、おいくつ？」

「……えっと……二十歳^{はたち}、で、す……」とミリヤムが答えると、周囲からは歓声が湧き上がった。

「まあまあ……上の階のお掃除を頼める人が来てよかったこと。最近本当に階段がきつ

くてねえ……」

「重いものも、高いところのものだって取ってもらえるわよ」

ホントねーとのんびりメルヘンに微笑む同僚達。ミリヤムは瞳孔開き気味の顔で上役を見た。

どうりで色々行き届いていないわけである。先日紹介状をくれた熊族のニーナも結構なご老体だと思ったが、同僚達もまた同じくらいの年代に見えた。

ミリヤムは、思わず声を上げる。

「上役様……この布陣には異議があります……大体……こんなご老体^{むすじ}に鞭打つような……」

水の入ったコップを持ち上げるだけでも手がブルブルしている灰色の犬系の老獣人を見て、ミリヤムはそのコップを取り、彼の口元にそっと当てた。

「ゆっくり、ゆっくりお飲みください……」

「おやおや……ご親切に」

可愛らしいお爺さんの笑顔に頷いてみせてから……ミリヤムは上役に鋭い横目を向けた。どう見ても、この戦力で広い砦を手入れたり維持したりするのは無理がある。

しかし猫の上役はきょとんとしてミリヤムを見た。

「どうかしたか？ 壮絶に気持ち悪い顔だぞ」

「だって……」

ミリヤムが尚も眉間に皺を寄せたまましていると、上役は「まあまあ」と笑う。

「彼等はベテランだ。これまで大した問題も起きていないし、隊士達からの苦情も特にない。人手はちよつと足りていないが……とても居心地のいい砦だ」

けろりとしたその言葉に、ミリヤムは耳を疑った。

部屋の外はもちろん、今見えている限りの場所ですら、隅や高いところには埃が溜まっていた。蜘蛛の巣だつてかかつていて、そこに更に埃が絡まっている。きつと高いところは彼等には掃除がしづらいのだろう。そもそも目が悪く、見えていないのかもしれない。

「……………」

「ははは」

ミリヤムのじつとりとした視線に、上役もさすがに苦笑いしながら頬を掻く。

「まあ、ここ十数年、隣国の国力が著しく衰退したおかげで国境戦線も落ち着いてな。配属される隊士の数は減らされる一方だし……あまり使用人の増員もできないんだ。新人が入ってきたものだいぶ前で……何より爺さん達が働きたいって言うんだ、職を奪う

わけにもいかないだろう？ ま、平和なのはいいことだ」

「……………」

「慣れればどうってことないさ、ははは」と、毛深い縞模様の手で背を叩かれ、ミリヤムは彼に殺気を放った――が、それと同時に、牝牛の顔の老婆がよろめき、カゴに入っていた豆を床にぶちまけた。

「あらあゝ？」

「おわーっ!？」

ミリヤムは慌てて豆を拾う。そのちょこまかした動きを見て、周囲からはほのぼのとした贅辞が贈られた。

「やっぱ若い人は動きが機敏だわあ」

「さすがだねえ、私はもう屈むのも億劫で……」

来てくれてありがとうと嬉しそうな同僚達の声を聞きながら、ミリヤムは複雑な気持ちで豆を追うのだった……

「……終わりが、見えない……」

数日後、ミリヤムは休憩時間に砦の内部を徘徊していた。

大きな麻袋を引きずり、燃料庫から拝借した炭バサミを駆使して、とにかくゴミを拾って歩く。袋がいっぱいになると焼き場へ持っていく、空になった袋で再びゴミを拾って回る。延々その繰り返しだ。だが、拾っても拾っても皆は絶望的にゴミだらけだった。その上地味に苦痛なのが、石造りの砦はとても寒いということだ。厚着をしていても身体は芯から冷えてきて、手がかじかむと炭バサミが上手く操れなかった。

「これは……かなり根気が要るわ……」

ため息まじりにゴミを拾っていると、傍を通りかかった隊士達がげらげらと笑いながら何かをポイ捨てしていった。どうやら、かじりかけの食べ物のようだ。

「……………」

それを見たミリヤムは、せめて袋の中に捨ててくれればと腹が立ったが……とても疲れていたたので彼等を叱り飛ばすのを諦め、ゴミで丸々と膨らんだ麻袋を引きずって焼き場の方へ足を向けた。

——と、その時、視界の先を歩いていった黒毛の隊士にハッと顔を上げる。が——

「違う……？ か……な……あ？」

相手はミリヤムをちらりと見たものの、そのまま視線を外して立ち去っていく。

ミリヤムが探しているのはもちろん、お疲れ気味の手ぬぐいの君である。先日彼か

ら借りた手ぬぐいは既に洗ってエプロンのポケットに忍ばせてある。

「……いないなあ……」

というか分からないのだ。黒い毛の獣人男性はたくさん見かけるものの、顔も見えないがゆえに、あちらから声をかけてもらわなければ識別しようがない。顔を見ていたところで、獣人族の顔がミリヤムに判別できるかどうかはとても怪しかったが。

こうして徘徊しているうちに、お疲れ気味の手ぬぐいの君と鉢合わせしないかと期待しているのだが……未だそれらしき相手に行き当たってはいなかった。

「どうしよう……お疲れ気味の手ぬぐいの君が親御様の形見が返ってこないとお嘆きになられてたら……困ったなあ……」

ただでさえお疲れ気味のようだったのに、とミリヤムはため息をつく。彼には親切にしてもらったこともあって、尚更気になっていた。

「ただいま戻りました……あれ？」

へとへとで下働き達の食堂に戻ったミリヤムは、ふと扉の傍にあったカゴに目を留める。

「ミリーちゃんお帰り。まあまあ……休憩時間くらいのにんびりしたらいいのに……早く

晩ご飯をお食べなさいな」

暖炉の傍で鍋をかき回していた、灰色の犬のような老婆がミリヤムを手招く。

「はい……あの……サラさん、ここに置いてあるカゴの中身……石けん、ですよね……こんなたくさん……埃かぶつてますけど……」

「ああ。これねえ……隊士さん達の大浴場用の石けんなんだけど、五年くらいここに置いてあるかしら。ふふふ……ここじゃ、石けんってなかなか減らなくて」

「へ……？」

にこにこ微笑む老婆の言葉にミリヤムの動きが止まる。

「減らないって……なんで……」

「皆さん、お風呂であんまり石けん使わないみたい」

それを聞いた途端、ミリヤムはぞつとして——カチンときた。

無駄なエネルギーは使うまいと思った矢先であつたが、先ほど抑えた分の怒りに、怒りの玉突き事故を起こした。そもそもゴミを一つ一つ拾うたびに呪わしい気持ち溜まっていたのだ。拾って歩いたゴミの数くらいは怒っていいはずだ。そのゴミ達は、既に焼き場でミリヤムの背丈よりも大きな小山と化している。

「ミリーちゃん？」

「……おのれえ……」

ミリヤムは石けんのカゴを掴むと一目散に走り出した。

窓の外は既に夜闇に包まれている。普通なら、大浴場には一日の汗や汚れを落とそうと隊士達が集まっているはずだ。

まもなく隊士用の大浴場に辿り着いたミリヤムは、その出入り口の傍に立った。柱の陰からこっそり疑り深い視線を向けていると、身体をホカホカさせた隊士達が次々と出てきた。それを見たミリヤムは、よかった風呂場は機能している……と心底安堵した。

だが次の瞬間、あることに気がついて愕然とした。

確かに、その出入り口からは風呂上がりの隊士達がひっきりなしに出てくる。ただ彼等と何度すれ違つても……誰も石けんの香りがしないのである。それどころか強烈に臭かった。辺りには生乾きの獣臭が立ち込めていて、うつと鼻を手で押さえる。とても風呂場周辺の香りではない。

ミリヤムは己の頭の中でぶちんと何かが千切れたような音を聞いた。

「……」

表情のない顔でおもむろにメイド服の裾をたくし上げ、ウエスト部分に挟み込んだ。

袖をまくり、靴を放り出してストッキングを脱ぎ捨てると、床に置いておいた石けんの

カゴの持ち手をしっかりと握り直す。そしてその中の石けんを一つ、もう一方の手で割れんばかりに握り締め、獣人の大男等がひしめく大浴場へと、ずかずかと乗り込んでいったのだった。

* * *

——その少し前のこと。

「ヴォルデマー様」

「ああ……外はどうだ？」

側近に声をかけられて、執務室で仕事をしていた黒い毛並みの男——人狼のヴォルデマーは机の上から視線を上げる。

彼こそがこの砦の長にして、屈強な隊士達をまとめる隊長だ。

眉目の整った精悍な顔つきではあるが、そこには濃い疲労の色がにじみ出ている。部屋に入ってきた豹の顔の側近はため息まじりに答える。

「今朝は天気も安定しておりましたが今晩は厳しそうです。雪もまだまだ降りそうですね」

その言葉に、ヴォルデマーの口から落胆の息が漏れる。

「そうか……ではフロリアン殿に来ていただくのはまだ無理か……」

現在、このベアエールデ砦は人材不足に喘いでいた。

直接的原因は、つい一月半ほど前に行われた大がかりな盗賊団の討伐作戦だ。

その頃、砦の周辺集落では、襲撃された挙句家屋に火をかけられるという被害が相次いでいた。その討伐に乗り出し、賊を捕らえた彼等の作戦は一応の成功を収める。

しかし——まったくの無傷というわけにはいかなかった。彼等もまた仲間に多くの負傷者を出し、大怪我を負った隊士の中には、長く隊を支えた副隊長の姿もあった。そうして彼を含む負傷者達が療養のため職務を離れると、以前からぎりぎりの人数で運営されてきた砦の人材不足は更に逼迫した問題となったのだった。

ヴォルデマーは当然の対策として、彼等の領主たる辺境伯に砦の人員増強を要請した。が、それが政敵達の妨害で未だ派遣されてこないのである。確かに彼等の言うとおり、ここ何年も隣国との国境線は落ち着いている。しかし、だからと言って国境警備を疎かにしていいわけではない。ベアエールデは歴史上、何度も戦が行われた場所である。その国境線が危ぶまれば領にも脅威が降りかかるだろう。それは砦の面々にとって、腹立たしいで済まされる話ではなかった。

そんな折……困り果てたヴォルデマーに一通の書状が届いた。封蝋の印は隣の領を治める侯爵家のもので、差出人は侯爵の息子フロリアン・リヒターと記されていた。

彼はヴォルデマーとは旧知の仲で、柔和だが賢く気骨のある青年だった。そんな彼がヴォルデマーの窮地を知り、配下と共にベアエールデへ駆けつけてくれると言う。自らのことを「なんなりとお使いください」と書かれた手紙に、皆の面々は深く安堵して、その到着を今か今かと待ちわびていたのだった。

しかし、天は彼等に更なる試練を用意していた。その直後、皆周辺は例年よりも早く本格的な冬季に入ってしまう。側近はその不運にため息を落とす。

「人族は雪と寒さに極端に弱いですからねえ……雪が少なくなるまでお出でになるのは無理でしょう」

ベアエールデ皆周辺は、国の一番北にあり、夏季は短く冬季が長い。冬は雪深くなるこの土地で、人族はその活動を大いに制限される。

隣の侯爵領からは馬を使っても四、五日はかかる距離で、街道は整備されているとはいえ山道も多い。更に雪があるとすれば、旅人にはかなりの負担がかかってしまう。下手をすれば死者も出るだろう。ヴォルデマーは致し方なし、と短い息を吐く。

「しばらくは我等だけでしのぐしかない……それで……他に報告はあるか?」

「はい、重要な件はこちらの書類に。あとは……ああ、そういえば下働きのニーナが退職いたしました、彼女の紹介で新任の者が入りました。何故か……人族の娘らしいですが……古参の者達からの評判はいいようです。よく働くと」

それを聞いてヴォルデマーが、ああ、と頷く。

「そういえば数日前に人族の娘を見たな。人手不足で掃除も行き届いておらぬからな……汚い汚いと泣き叫ばれた」

雪の舞う中、細い身体に大荷物を負い、鼻の頭を赤くして、仁王立ちした足は寒さにぶるぶると震えていた。外套をかぶった自分はズングリとして大きいし、剣と牙を備えた隊士相手に初対面でよく怒鳴り散らすものだ、その度胸には感心した。まあ、鼻水を垂らしながら怒られても面白いばかりで少しも怖くはなかったが。

そういえば、ついでに手ぬぐいを奪い取られたのだったと回想するヴォルデマー。娘はリスのようにちょこまか逃げていって、なんだか笑いを誘う光景だった。その時のことを思い出した男の口から、ふっと笑いが漏れる。

「……人の女は可愛らしいな」

苦笑まじりに呟くと、側近が盛大にギョツとした。

「ヴォ、ヴォルデマー様!? い、いかがなさいましたか!? ヴォルデマー様の口から女

人の話題が出るなど……」

体格がよく毛並みも豊かで、剣を持たせても素手で戦わせても恐ろしく強い彼は、獣人族の間では注目を集める存在だ。男女問わず彼を慕う者は多く、妻の座を狙って集まってくる女人も多い。

だがしかし、普段この堅物の人狼隊長からは女の話など欠片も出てこない。

側近は周辺集落に出向いた時に、彼が美しい雌の獣人から誘惑されるのを幾度も見たが、彼は顔色一つ変えなかった。

仕事ぶりに関すること以外では、お世辞でだって女性を褒めたこともない。そんな彼の口から「可愛らしい」などという台詞を初めて聞いて、側近は戸惑い、こう思った。「やはり相当お疲れなのだ……！」と。

黙々と職務に勤しむ上官を見て側近は青ざめる。

彼の執務机の上はいつ雪崩が起きてもおかしくないような書類の山だ。勤勉な彼が肅々と片付け続けていても、次から次へと仕事は舞い込んでくるし、もしそれらが片付いても、実直なヴォルデマーは翌日の仕事に手を伸ばしてしまう。

それなのに隊士達の訓練には欠かさず参加するし、周辺集落の復興にも出向く。夜はいつまでも部屋の灯りがついていて、いつ休んでいるのか……いや、休んでいるのかど

うかも怪しかった。疲れない方がおかしい。とにかくこれ以上仕事を続けさせてはまずい、と側近は慌てる。

「……ヴォルデマー様……お願いです、今すぐお休みになされてください！」

「……? いや、時間が惜しい。夜に隊士長達が報告に来るまでに、少しでも仕事を終わらせておきたい。私は平気だ」

「……しかし……しかし……」

既におかしな言動が出ているではありませんか、と側近は言いたかった。

「……ではせめて気分転換にご入浴でもなさっては? あまり根を詰められるとお身に障ります。あなた様にまで倒れられたら、この些は一気に瓦解しかねないですよ!？」

「……いや、しかし……休んでいる暇など……」

と、長が机の上の書類を手に取りうとした瞬間、側近の猫目が吊り上がった。

「ヴォルデマー様!!」

「……いや!! と威嚇音が出た。」

側近が毛を逆立て牙を剥いて怒るのを見て、さすがのヴォルデマーも思わず手を止める。表情は無表情から変化しなかったが、三角の黒い耳がわずかにしゅんと垂れ下がった。

そうして結局ヴォルデマーは、強制的に部屋から追い出された。廊下で一人、ため息を零す。側近はいきなり取り乱していたが、自分は何かおかしいことを言ったのだろうかと言を傾げた。理由がこれっぽっちも分からなかった。

「……これも務め……か……」

さっさと行って、さっさと戻れば済むことだ。意を決して、彼は大浴場に足を向ける。その浴場で……とんだ災難（？）にあうことを、彼はまだ知らない。

「そこにお座りください、黒の旦那様」

大浴場でお湯をかぶり、脱衣所に戻ろうとした瞬間、視界に飛び込んできた小柄な娘。黒の旦那様と呼ばれたヴォルデマーは、それを息を呑んで見下ろした。

いるはずのないのを見たせい、若干目がチカチカした。最近疲れが溜まっているから幻覚かと思い、瞬きしてみたが、その奇妙な娘は消えなかった。

娘は全身がずぶ濡れだ。恐らくそれは、つい今しがた自分が身体を震わせ水を払ったせいであろう——となんとなく察しはついた。

とりあえず「……すまない」と呟いてみる。だが洗い場を指差してこちらを睨んでいる彼女に、ただただ疑問と戸惑いばかりが生まれてきて……ヴォルデマーは成り行きを

見守っている部下達に困ったような視線を向けた。

顔を見合わせる者、手ぬぐいを手にしたまま動きが固まっている者。

様々な獣人族の男達——付け加えるならば皆、裸——に囲まれて堂々と仁王立ちする、若いメイド服の女。

ヴォルデマーも部下達も、その不可解さに皆黙り込んでしまう。周囲には体格のいい裸の男達がひしめいているというのに——その躊躇と恥じらいのなさに、男達は束の間、啞然とせざるを得なかった。

そもそもこの砦には使用人を含め、人族、それも若い女人となると、ほとんどいたことがない。内勤が主で外に出ていけない者に至っては、ほとんど幻の生き物レベルで目にしたことがないだろう。

「それがよりによって何故ここに……」と、皆が未だピンとこぬ頭で怪訝に思った時——その浴場にもものを取り落としたような音が響き渡った。

カラン、カラン、と反響していく音を聞いて、数名の男達がやっと我に返る。残念（？）なことに、メイド服の娘よりも先に毛むくじやらの大男達の方が恥じらいやらなんやらを思い出した。

「う……おい!? お前……何やってんだこんなところで!？」

「気は確かか!? ここは隊士用の浴場だぞ!! 女の来るとこじゃねえ!」
 そうなのである。そうだよな、とヴォルデマーも無言で片眉を上げる。

周囲には温かそうな湯気がもくもくと立ち上^{のぼ}っていて、その中に見慣れた隊士達の姿がある。もちろん皆、前なんか隠さない。それはいつもどおりの光景だった。

——その娘が仁王立ちしている以外は。

ここは砦内の大浴場で、駐留する隊士は全てが男。というかほとんど雄。使用人にはいくら女性もいるものの、それも全て獣人族だった。そんな彼女達ですら、使用中の浴場に正面切って乗り込んでくることはない。

その時、一人の隊士が怒鳴って娘の首根っこに手を伸ばした。

「犯されてえのかてめえ!」

言葉の荒さにヴォルデマーが眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せる。だが、彼が隊士^{たしな}を窘めようとした、その瞬間。

すこーん……ッ!! ——と、真新しい石けんが隊士の顔面に当たった。

「おお……」

思わぬ反撃だったせいにか、隊士が見事に後ろに引っくり返って、ヴォルデマーの口から感嘆の声漏れる。

「……お黙りあそばせ、この掃除後のモップ様め!! 犯す!? 発情期か!!」

娘は言い放つとヴォルデマーに向き直る。隊士達の威圧など一つも応^{こた}えていない様子はなかった。

「どなたかここを浴場だと言いました!? こんな泥だらけの場所がお風呂ですって? 正気ですか!? 泥美容なんてガラじゃないでしょう!? 見てましたよ黒の旦那様……あなたさつきここに入ってきてお湯かぶって、それでブルブルして、脱衣所に戻ろうとしましたよね!? しましたよね!? 石けんは!」

「……いや、その……今夜はまだこのあとに仕事が……」

娘の圧に押されて思わずヴォルデマーが仰け反る。彼としては寝る間を惜しむほど多忙な日々がゆえに、入浴も手早く済ませたかったのだが……娘はヴォルデマーの言葉を聞くと腹立たしげに「不衛生でございます!!」と吐き捨てた。その声に込められた並々ならぬ怒りに、ヴォルデマー達は瞳^{またた}を瞬かせる。

「ここに置いてある石けん全部、使われた痕跡もないままカピカピじゃないですか! しかも全部端っこに捨てられてるし!! あんなに悲しい石けん初めて見ましたよ……一体皆さん、なんのためにお風呂に入ってるんです!? 見てくださいよ! ろくに身体も洗わず湯に浸かるから浴槽のお湯が泥のようです! 汚い! 臭い! 毛が浮いて

る!!」

怒りに震える指が差し示す広い浴槽を、一同は思わず無言で見つめる。

確かにそれは濁^{にご}つていて綺麗だとは言いがたかった。湯は不透明どころか茶色だったし、様々な色、長さの毛がたくさん浮いていた。

しかしこの「獣砦」ではこれが当たり前の光景だった。皆、そういえば透明ではないな、とは思ったが、それをおかしいとは思っていない。獣人九割、そして男九割を占める寒さの厳しいこの砦では、身体さえ温まれればいいと、皆がそう考えていた。

——の、だが。

娘は小脇に抱えていたカゴから石けんを掴み取ると、ヴォルデマーの鼻先にそれを突きつけた。顔からは血の気が引き切って、ちよっと正気に見えない。目が据わっていてとても怖かった。

「こんな砦にお勤めしてはフロリアン坊ちやまがご病気どころか死んでしまう……!! もしそんなことになったら全員、洗濯板で撲殺^{はくころ}してやる……お覚悟なさいませ……!!」

「……? ……!!? ……!!」

周囲がその不可解な言葉に戸惑いつつ首を傾げている間に——彼女は目の前のヴォルデマー（裸）に突進した。娘を咄嗟^{とつさ}に受け止めたヴォルデマーは、洗い場の床に倒れ込む。

「っ……っ」

「ヴォ、ヴォルデマー様!」

慌てふためく隊士達の叫びもなんのその。娘はヴォルデマーの黒い豊かな毛並みの上にまたがった。

「よかったですねー、まだ坊ちやまのご着任前で……ふふふ、いえいえ、大丈夫ですよ、私めが」

みーんな綺麗にしてお日様の香りにして差し上げますからね、と娘は青ざめた顔で不気味に笑うのだった……

一体何故こうなったのだろうか、とヴォルデマーはぼんやり虚空^{こくう}を見つめていた。彼の耳の傍^{そば}では、娘が雄々^{おお}しき叫びを上げていた。

「うおおお!! もう!! どうしてこんなにボサボサなんですか!? 人族よりも毛がたくさんののに、ちゃんとお手入れしないなんて正気の沙汰か! 皮膚病に……なるっ!!」

「……」

石造りの洗い場に胡坐^{あぐら}をかかされ、背後からわしわし擦^{こす}られて身体がグラグラと前後

する。

しかし、そんな娘の叫びを聞きながらも、ヴォルデマーはうとうと目を細めていた。大浴場はほかほか温かいし、何よりここ最近の疲労の蓄積がかなりきていた。そうして睡魔に誘われながらも、ヴォルデマーはどうして今自分が、この己よりもかなり年下だろう人の娘に叱られながら身体を弄られ……いや、洗われているのだろうかと考えていた。それも素っ裸で。

(……そういえば、最近はずいぶん忙しくて身なりも後回しになっていたか……)

豊かな毛並みの手入れは、丁寧にしようとするのと一苦労で時間もかかる。ここ最近では気温が低いのをいいことに、つつい適当になっていた。

(……自業自得か……)

そうヴォルデマーがぼんやり思っていると、背中を流していた娘がいきいき言いながら今度は腹側にやってきた。ヴォルデマーはしげしげと見つめたが、彼女はしかめ面で彼の毛並みばかりを見ていて、視線はちっともかみ合わない。

娘は波打った栗毛を後ろで一つにまとめ、瞳も同じ色をしていた。肌は白いようだが、今は怒りのせいか紅潮していて、額には汗が光っている。時折「坊ちゃまが……」「暴動が……」と、謎の言葉を呟ういていた。



ここまで来ると、さすがのヴォルデマーも、彼女が先日砦の外で泣き喚いていた娘なのだと気がついていた。しかし、娘の方が彼に気づいた様子はない。娘は憎らしげでありつつも懸命に、ヴォルデマーの毛並みの上で石けんを泡立てている。

娘がわっしわっしと彼の身体を揺り動かすたびに、周囲で隊士達がおろおろしているが、彼女があまりに必死なのでヴォルデマーは隊士達を制し、ひとまずされるがままになつていた。

己が裸であり、それが娘の目に晒^{さら}されている以外、特に害はなさそうだった。そしてヴォルデマーも、それをいちいち恥^{はづ}かしいと騒^{さわ}ぎ立てるほど繊細ではない。

(……ふむ……そうか)

先日出会った時、彼女は砦の惨状を見て清潔にしてみせると豪語していたが、手始めに綺麗にされるのは自分だったか。ヴォルデマーはほんやりそう思った。まあ砦の代表として、それはそれで相応^{あさわ}しいことなのかもしれない。

ただ意外なことに——この娘、気は荒そうだし動きも速いが、手つきだけは丁寧だった。両手の爪も短く清潔に整えられていて、乱暴にしているようで、痛みなどは特にない。むしろとても心地よかった。

他人の世話を焼くことに慣れているのだな、とヴォルデマーは感心する。おかげで彼

の疲れもだんだんとほぐれてきて、眠気は抗^{あらが}いにいくところまできていた。

(……そろそろ会議、が……、……、……)

側近が案じていたとおり、彼は何日もともに眠っていないかった。そんな彼が金色の目を細めてうつらうつらしていると、それを見て周りの隊士達が色めき立つ。皆、この生真面目な上司が仕事に追われ、ろくに休めていないことを知っていた。

「ど、どうする？　ここでお眠りになられたらどうすればいい？　そつとしとくべきか？」

「馬鹿!!　ヴォルデマー様をこんなところで寝かせておけるわけないだろ!!」

「いや、大体……あの変な女をどうしたらいいんだ!？」

「しかし……ここは一つお眠りいただいた方が、お身体のためには……」

「よしっ……もう少し……もう少しで落ち……やれ、落とせ!」

——と、隊士達が密かに団結しているのも知らず、ミリヤムは一人泣きたい気持ちになつていた。恐ろしいほどに石けんが泡立たなかったのだ。

「ひいひい……毛が、毛がいっぱい抜ける!!　換毛期!?　換毛期なの……!？」
隊士一人にこんな時間がかかるなんて、砦の掃除もしなきゃいけないのに……全員終わる前に雪解けして坊ちやまがお着きになつちゃうじゃないのよおおお!!」

獣人族の毛量を甘く見ていた!! とむせび泣く娘をよそに、男はほのぼのうつらうつらしている。

そんな浴場内の騒ぎを見て、掃除に来たお爺ちゃん同僚は一言。

「ふお、ふお、ふお、ミリーちゃんは頼もしいのお」

……下働き仲間からの評価は高まった。

だが——次の日、彼女が隊士達につけられた通り名は……痴女のミリヤムであったという。

* * *

——翌日。

「や、やめろ! こら! どこに行く気だ!」

「お、お前は……恥じらいもないのか! この、痴女め!! 止まれ!」

と、罵られたミリヤムは、制止しようとする隊士達の足の隙間を潜り抜け、そして叫んだ。

「嫌だ!」

立ち止まって振り返り、ミリヤムは胸を張って言い放つ。

「絶対につ! 嫌だ!!」

その言い切りように、隊士達が啞然とする。

「な、何故そこまで……」

「人族の女は分かん……何故そうまでして風呂場に侵入したい!? お前、何が見たいんだ!? やはり……」

——と、隊士が言いかけた頃にはもう、ミリヤムは隊士用の脱衣所に侵入していた。

中からいくつもの怒号が上がっているが、そのうちの一つはミリヤムのもので間違いない。

冷酷な顔をした娘は、目をつけた毛深い隊士の腰元にかじりついて、ぐいぐい服を剥いでいく。

「観念してお脱ぎあそばせ!! さあ! さあ裸に! 嫌なら服着たままやります

よ……!!」

「お、お前!? 痴女の……つ、やめろ! 俺には恋人が……!!」

「埃まみれで馬鹿言っな! 綺麗になって彼女様に花でも持ってけ!!」

「ひー!!」

長年使用人として主の服を着せたり脱がせたりしていたミリヤムは、服を剥ぐのがとても上手かった。獣人の隊士はあっという間に裸にされ、周囲では、難を逃れた隊士達がそそくさと逃げていく。そうして今日も幾人かの隊士達が犠牲になり、ふんわふんわの毛並みになって石けんの香りを漂わせ、脱衣所から出てくるのであった。

その表情は皆、とても複雑そうであったという。

「気持ちいいでしょう!? ね? 身体が綺麗って素晴らしいでしょう!」

清潔さの重要性を説こうとにじり寄ってくる娘に、隊士達の反応は微妙だ。

「いや……まあ……確かに……な……」

「いや、だが……色々見えて……」

「見えても気にしません! それどころじゃないですよ!」

恥じらっている場合か! と娘は容赦ない。だが皆思った。いや、お前が恥じらえと。

そんなこんなで数日も経つと、誰も彼もがミリヤムを見ればコソコソと耳打ちし合い、終いにはあからさまに避けて通るようになった。

洩れ聞こえてくる言葉はもちろん「痴女のミリヤム」である。

噂では彼女は「臭い男(雄)が好きだ」ということになっているという。石けんの匂

いがしていないと狙われるという噂がまことしやかに囁かれ、少しずつ石けんの使用率が上がっているらしかった。

「くっそ……腐ってもフロリアン様の侍女である私を痴女呼ばわりとは……なんだ臭い男が好きって! こちとら清らかな坊ちやまの匂いが死ぬほど好きだわ!」

ぶつぶつ言いながらも、今日も今日とてゴミを拾う。

昼は本職である洗濯番をこなしながらゴミ拾い、もしくは掃除に奔走した。そして夕方から夜にかけてはちよくちよく大浴場を覗き、特に汚れていそうな隊士が来ると突入して飛びかかった。もちろんお湯の入れ替えと湯焚きの手伝いも欠かしていない。

だというのに……いくら入れ替えても、次に様子を見に行くと、お湯はちよっと引くくらい土色で毛だらけなのだった。

それを見たミリヤムが怒り、居合わせた隊士に突撃していくという——負のスパイラル。

そしてそれはただただ、隊士達の間でミリヤムの「痴女」ランクが上がっていく結果となるのだった。

この現状を不毛とは思うものの……ミリヤムは愛しい坊ちやまを思い出すとガタガタ言っていられなかった。せめてもの救いは同僚達が皆一緒に腹を立ててくれたことなの